

み
づ
ゑ

第六十六

明治四十三年九月三日發見

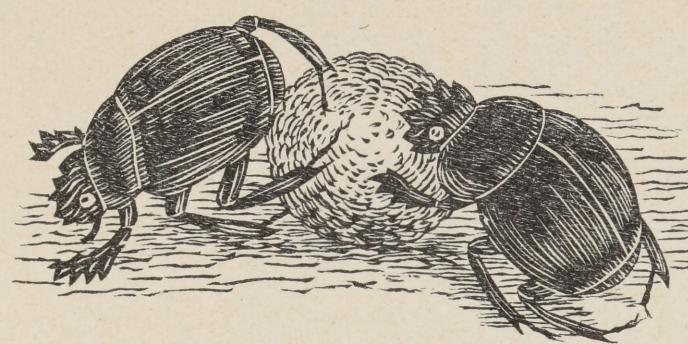
スカラブと埃及人との關係

長野菊次郎

近來は昆蟲の形態を圖案に應用することが次第に多くなるやうだが、元來昆蟲といへば比較的小形のものであるから、古來之れが應用は到底獸類又は鳥類其他一般の脊椎動物の直接に人に關係を有するものや、又は目につくものゝ應用と伴ふことの出來なかつたのは當然である。然るに埃及に於ては少くとも西暦紀元前千七百年、即ち今日より三千六百年の昔しに一甲蟲が既に圖案に應用せられて、大は壯嚴なる殿堂の裝飾より小は日常の器具衣服の紋様又は呪符等に至るまで之が用ゐられて居るのである、之はスカラブと云ふ者で昆蟲學上よりいへば鞘翅目の金龜子科(*Scarabidae*)のセンチコガネ亞科(*Geotrupinae*)に屬するものである。餘り大きくもあらぬ此甲蟲が數千年の昔より埃及人に知られて、併も之が種々の場合に應用せらるゝに至つたのは何故で有ふか、一口に云へば埃及人の宗教的迷信より出てたるものにて、此蟲の奇なる習性と其形態とが原因をなしたものである。元來埃及人が宗教上種々の動物を尊信することによく人の知る所で猫、犬、鳶、狼、牡牛、鰐魚等に對しては種々の寓意のもとに或は食物を供したり、又は一定の場處にて養育することもある。特に此等が死する時は其死骸を白布にて包み、香油等を撒布して丁寧に之を墓地に葬ることもある。然れば昆蟲中にも獨りスカラブのみならずバッタの如きも多少の敬意を表せられたものと見え、之が圖案の如きもスカラブと前後して應用せられたとの事である。那威の學者ビヤムスヤーム(Bjornstjerne)氏の説によれば、元來スカラブは印度人間に於ける造物者の普通の記號であ

るが之が埃及に移り後にはスカンヂネビアにも及んだとの事である。此説によれば印度の方が寧ろ埃及よりも根本であるが併し今日では印度に於けるスカラブの事につき云々する人は殆んど聞かぬ様で、スカラブと云へば直に埃及を聯想することになつて居るやうである。

扱埃及人が神聖の甲蟲として重に用ゐたのはアテウクスサセル (*Ateuchus sacer* L.) である。此ものは埃及南部歐羅巴の全部、喜望峯、東印度、支那等にも産するもので長さ七八分位の黒色に光澤を帶びたる種である。始めリニアス氏がスカラビュース、サセル (*Scarabaeus sacer*) と名つけたが、近來の學者は多くアテウクスサセルの方を用ゐて居る。古代の埃及の畫及び呪符其等日用の器具等に多く此形を表はし、時には非常の大さに廓大して宮殿等の裝飾に用ゐたるを見れば、此甲蟲が埃及人に尊敬せられた事は疑を容れない。然るに此黒色種のみならずして美麗なる金綠色の者のが用ゐられて居ることがある、歴史の父と云はれたる希臘古代の歴史家ホロドダス (*Horododus*) 氏も亦此色につき記して居るが、此金綠色種は久しく埃及にて發見せられざりしにより個は多分埃及人が尊嚴の意を表はさん爲めに、殊更黒色を金綠に書きしならんとの想像は多年の間諸學者の腦裡に浮んで居た。然るに千八百十九年カイラウド (*M.Caillaud*) 氏は此種をホワイトニール河 (*White Nile*) の沿岸なるメロー (*Maroe*) といへる地にて見出した。其後他の地方にても此種が採集されたのでいよいよ金綠色の種が實在することが分つた。よりて當時佛國有名の動物學者キューベー氏 (*Cuvier*) は此種に對しエジプトラム (*Ateuchusaegyptorum*) の名を命じた是によりて二種は確に埃及人に



(寫縮りよドルーチウトクセンイ) 狀すば轉を球小かブラカス

センチコガネ屬 (*Geotrupes*) ダイコクコガネ屬 (*Copris*) の或種其他一二の甲蟲も均しく尊敬せられたるものと

見ゆる。現にセベス(Thebes)の塔内には此サビタマムシ属の一種が防腐法を施されて伊乃木と同様に保存せられてあつたさうである。

スカラブの習性は非常に面白きものにて、其食物は日本に於けるセンチコガネなどと同じく多く家畜の糞を好むものであるが、特に埃及に於ては駄駱又は牛の糞を擇び土と共に轉ばして小球を作るのである。小球を作るには重に後脚の働くによる、南部佛蘭西にて觀察せられたる處によるに此甲蟲は家畜又は他の動物の糞塊を破碎し之を轉ばして埋むるにより掃除人の役目をするものと云はれて居る。即ち雌は糞塊の一部を分離せしめて小球を作り、往々拳大に至ることがある。之をなすには重に後脚を用ゐるも、必要があれば其廣き頭にて之を押し、又後方へ退く時には前脚にて球を引く事もある。精力を盡し忍耐を續けて此技術を完成するのは實に一驚に値するさうである。然るに往々二四掛りにて此球を作ることがある、仲間は通常矢張り雌である、かくて兩々相扶けて其球を押し適當の場處に達せしむれば其處に穴を掘りて之に球を容るゝのである。然るに往々其補助者たる相手が好機を見て此球を奪ひ去り、遂に己のものにすることがある。斯る馬鹿な目に遇ひても被奪者は少しも失望することなく、奮闘して小球を適當の場處に埋むることを成就する。元來何の爲めに球を運ぶかと云へば無論食物に供する積りであるが、目的を遂げた以上は殆んど間斷なく之を貪食するのである。斯くて之が盡くる時は再び同様の方法にて食料を運ぶのである。此等の状態は春に見るべきものにて、若し夏の暑き時候に際すれば殆んど沈靜の状態を保ち、秋に至りて再び活動を始むる。此折には子孫繁殖の爲めに大なる穴を地に穿ち、中等の苹果大の糞塊を此處に運びて叮嚀に之を配置し、然る後に産卵するのである。其糞末の配列は實に巧なるものにて、幼蟲が孵化するや否や最も柔なる樽と滋養物とが直に身の周りに在る様になつて居て、粗雑に又養分乏しき部分は、幼蟲が多少強壯になつて後に達せらるゝ様に出來て居る。尙此等の配列を終りたる最後に、一層美味にして滋養に富める糊狀物を躰り立ての幼蟲の最初の食物として母蟲が用意するのである。蓋し此物は母蟲の

器官にて一部分消化したものである。此等の注意周到なる準備が全く出来た後に母蟲は適當の位置に卵を産し其後其穴を閉鎖するとのことである。埃及にて毎年例のニール河の洪水があるから、此甲蟲は糞塊を地上に轉ばしてニール河の洪水面より高き所まで之を運び、其所に穴を掘りて之を埋め靜に幼蟲の孵化を待つさうである。此特異なる習性が重に埃及人に一種の迷信的尊敬の念を生ぜしめた原因であつて是に附隨して其形態にも色々の意味が附せらるゝ事になつた様である。これ等の理由につき埃及の形象文字に精通したるホラポール(Horapollen)を始め種々の學者の説があるが、一々之を擧ぐるは却て繁雑を極むる次第であるから唯其大要を述ぶることにする。

前述の如く此蟲の有せる奇性と其形態とにつき埃及人はスカラブ(Scarab)に種々の寓意を附して居る。第一、宇宙の意 埃及人の言によれば此蟲は創造せんことを希望して、後脚にて小球を轉ばすこと日出より日没に至る、これ天體の運行に擬するなりと。

第二、太陽の意 或學者の考察によれば、此蟲が頭上に有せる有角突起は、恰も太陽の放射の光線に類し、又脚の跗節數が各脚共に五節にして、都合三十個あるは正に一ヶ月の日數に相當するにより、太陽の意義を生じたりと。

第三、太陰即ち月の意 埃及人は此蟲が小球を地面に置くこと二十八日間にして、二十九日目に其球を水中に投ずるものなるが、之が開けば雄を生ずるものと信じて居る。二十八日は月の一週日數にて、月暦の一个月なるより太陰の意を表はし、往々印章等に刻したるスカラブには、三十あるべき跗節を二十八に減じたるもの有りとのことである。

第四、世界の意 宇宙の意より轉じて世界の意義をも寓せらる。

第五、神即ち造物主の意 元來埃及人は、他の甲蟲には雄雌あることを承認せるも此甲蟲は唯雄のみにして雌無きものと信じて居る雄が子を生ずる筈はない故に、此蟲は糞塊より自然に發生するものと思はれ

て居る。無より有を生ずるは唯神の力のみなるを以て、此蟲にも造物主の意が寓せられたるものである。

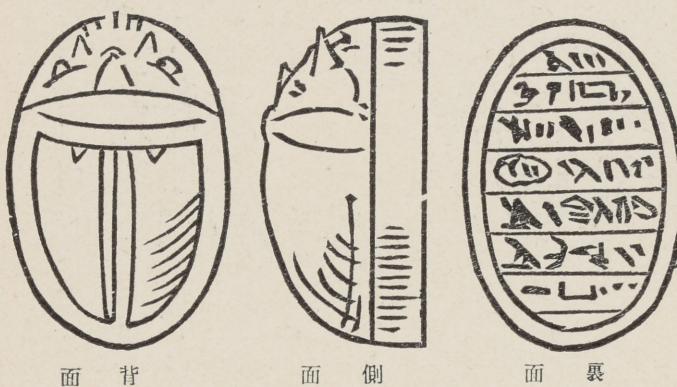
第六、男子又獨生獨立の意 生ずる子は皆雄のみにして、母の庇護を享げざるに獨生又獨立の意は自ら生ずることになる。

第七、勇猛の戰士の意 雄のみして雌なく、即ち女子なくして男子のみなるより自ら勇猛の意を生じ、兵士の衣環等に總て此蟲を彫刻することになった。

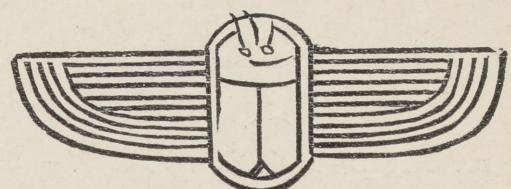
第八、多産の意 此甲蟲は多數の子を生ずると云ふ念慮より、多くの子を産せんと希ぶ女は往々此蟲を喰ひたることありと。

圖の章印の世四ブツテ - ホンメア
(生寫士學工田武にて館物博英大)

一の分二の寸現



圖のブラカスルたれさ用應に飾首
著ウタメゼー ケブユリ
リよ部代古史術美



ルホーテツプ王の殿堂の天井畫中にあるものにて、今を去ること略三千

大英博物館にて武田工學士寫生



スカラブ紋様
第一卷より
ウエルマン美術史



様紋スカラブ

(代古著一エビシーロベ)
リヨ部の及埃及術美

六百年の古である。扱此蟲を應用したる形態につきては種々の形式がある。牀はスカラブであつて、頭部に種々の神、人、鷲、羊、犬、猫を用ゐたものがある。鷲及び羊の頭を有せるは太陽の記號ださうで、最も多く見るものである。又スカラブを神として表はすときは牀をして、頭部に此甲蟲を附することが通例である。ブターソカリス、オシリス及びケブラ神の如き此類である。圖案化せられたるものには、多く其前肢及び後肢に球を保持して居る。又神聖の意を表する爲には翅を展張せしめたものがある。形象文字中にて、疊みたるか又は開きたる翅を有して、神の頭を附せるは造物主の記號であつて、又人の頭と人の脚とを加へたるは造物主の創造力を示したものださうだ。此の如くスカラブは埃及人の思想上に多大の關係を有するものであるから、古來之につきて深き研究をなし、種々の考證を擧げた學者は澤山ある。又スカラブと圖案とは往古より非常に深き關係があるから、之れを研究した人も少くない。其の中で最も完全なるものはローフチー氏のスカラブ論(千八百十四年出版)及びペトリ一氏の歴史的スカラブ論(千八百八十九年)である。そうだ。此外此蟲につきて話すべき事は澤山あるが、餘りくだくしくなるから此位にして止めて置く。併し最後に附加したきはスカラブ類似の一甲蟲が、臺灣及び韓國に産することである。其名をクロヒラタコガ子(*Gymnopleurus sinnatus*)といひ、矢張り獸蓄の糞塊を丸める奇性を有して居る。今現に、名和昆蟲研究所にては之が生きたるものを韓國より取り寄せて飼育して居る。

此篇は、外國の昆蟲書數種と外國歴史數冊とを參照して、其中より面白さうな部分を嵌工的に取り合はせたのである、素より藝術の素養なき者が昆蟲の方面を主として

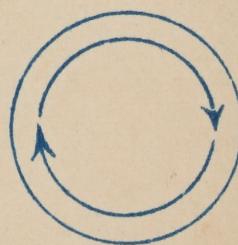
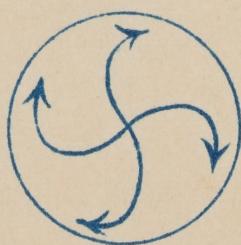
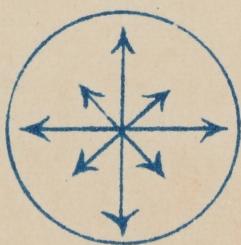
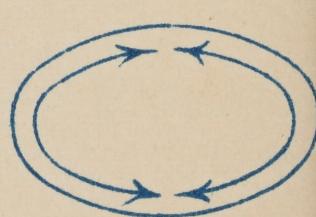
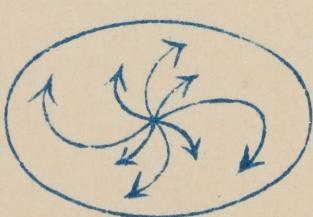
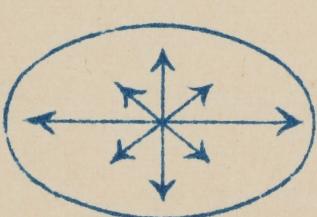
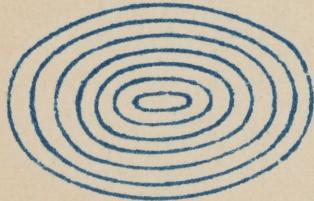
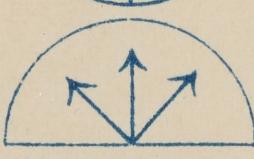
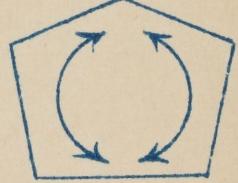
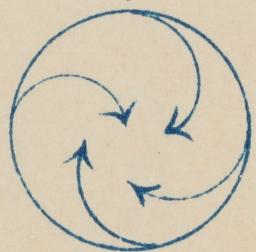
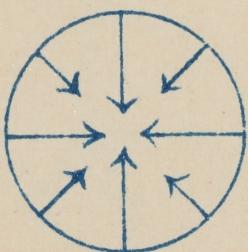
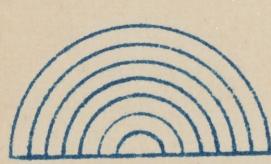
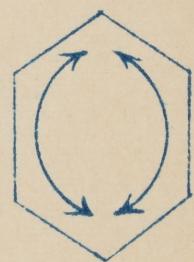
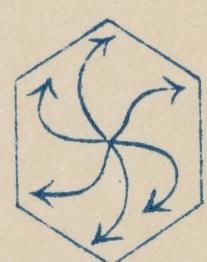
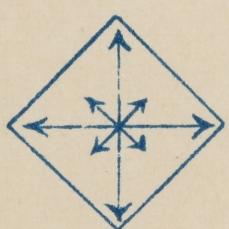
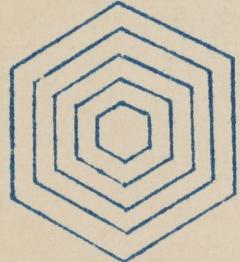
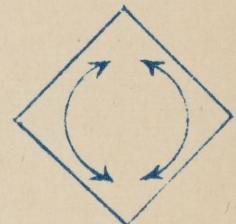
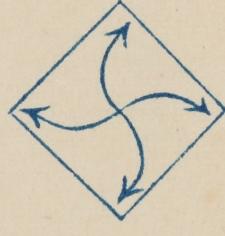
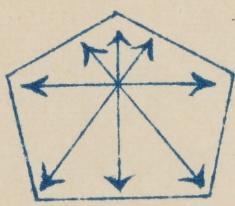
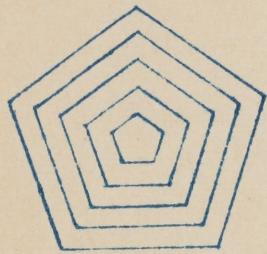
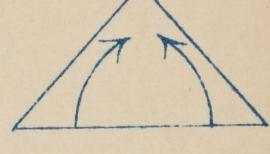
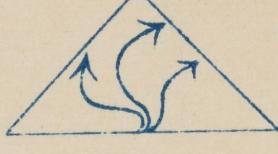
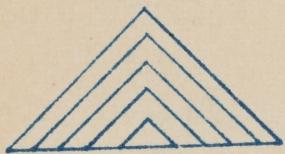
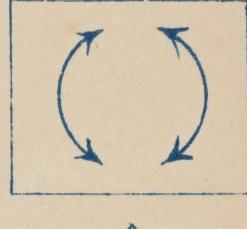
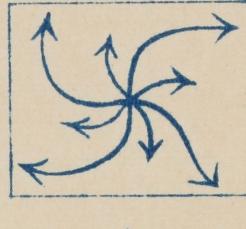
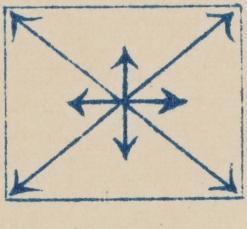
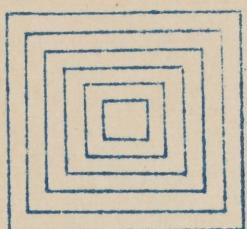
單獨の様模組

波及狀

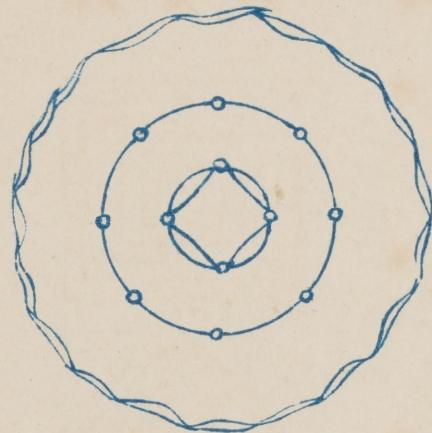
散光狀

巴文狀

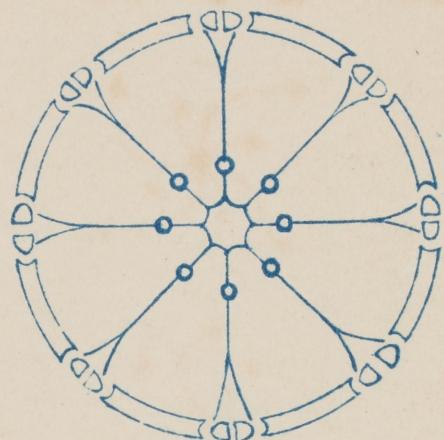
對照狀



(シベス合照ト組骨) 例作の様摸單



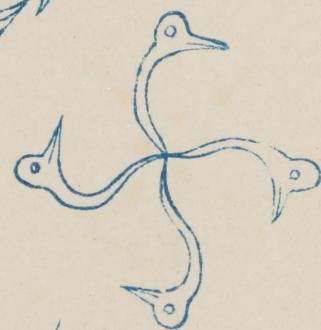
波及状



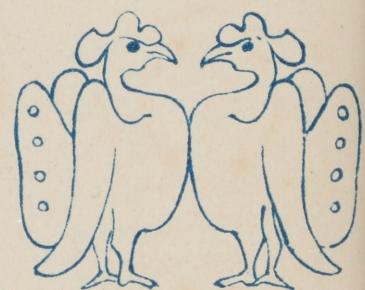
散光状



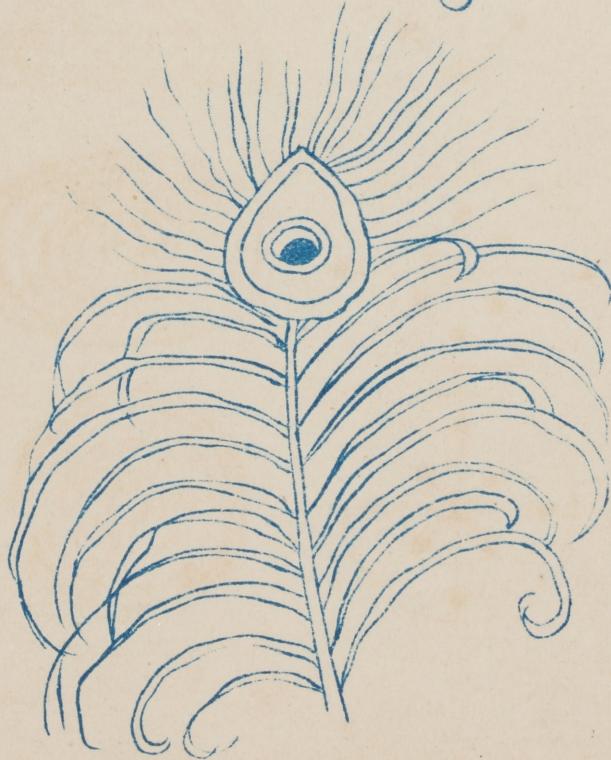
巴文状



对照状



不正形式



書いたのであるから、本誌の愛讀者に對して十分の興味を喚起せしむることは到底覺束ない次第である、併し挿入せせる圖畫中には、工學士武田五一氏が實物より直接寫生せられて他に比類ないものがある。この他同氏が貴重の圖書を涉獵して、必要な事項の記載と、是に關する圖畫とを送附せられたるは深く余の感謝する所である。

圖按法概要〔十三〕

比

奈

地

畔

川

各種の模様

一、單獨模様

或る目的の爲めに作られたる獨立したる模様である、則ち同形狀にせよ不同形狀にせよ模様の連續することなくして作られたる一個の模様である。

單獨模様の形式を分類するには先づ外廓の形狀を以て二種に大別する。則ち

〔一〕 正形式のもの

〔二〕 不正形式のもの

是を更らに細別して、

〔一〕 正形式(圓形、橢圓形、半圓、五角形、六角形、長方形、菱形、及び各種の三角形等)

〔二〕 不正形式(外形の一一定せざるもの)

とする。

上記の正形式に屬するものゝ内部の(籍入する處の)模様を、更らに四種に分つ。

波及狀 散光狀 巴文狀 對照狀

である(挿圖に就て看るべし)